Title	序 ：「自由の伝統の再検討」
Author(s)	大木，英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.9, 1996.3 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3032
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序――「自由の伝統の再検討」

一九九五年九月二十二日と二十三日に、ケンブリッジのグラハム・ハウズ氏、オックスフォードのチャールズ・ブロック氏、プリンストンのジョン・ウィルソン氏を招き、たまたま来日中であった次期オックスフォード大学副総長となられるコリン・ルーカス氏をも迎え、聖学院大学総合研究所主催の国際シンポジウム「自由の伝統の再検討」が、東京池袋のホテル・メトロポリタンと王子の北とぴあで開催されました。本研究所から飯坂良明氏、永岡薫氏、渡邉守道氏らがコメンテーターとして参加し、各方面から研究者にお集まり頂き、活発な討議をも加えて、有意義な研究会となりました。本号は、その記録が中核となり、さらに、本研究所で発表された内外学者の諸研究が掲載され、いつもよりも分厚いものになりました。これは、本研究所の活動の発展の証示でもあり、喜ばしいことと思っています。

「自由」は、人類の歴史、とりわけ近代の歴史における憧憬でありまた問題でもありました。近代世界を省みれば、自由の増大は顕著なものであります。しかしその増大は、それにまつわる問題の解決を伴うものでなかったことを思わざるをえません。戦後日本における自由の増大も同様で、それがもたらす問題の解決をますます困難にすることと思います。その予感の中でわれわれは、「自由の伝統」を再検討しようと致しました。われわれは、自由を「自由の伝統」か

ら離れて抽象的哲学的に「定義」して出発するよりは、歴史的に自由の「伝統」に学びつつ自由の内容の認識を企て、それをもって議論の共通基盤とする行き方をとろうとしたのであります。自由意志の問題の哲学的議論よりも（もちろんそのような議論が必要であることを否定するのではありませんが）、より社会的自由の伝統の理解を重んじてまいりました。今回の国際シンポジウムでアングロ・アメリカの学者を招いたのは、そのような問題意識の故であります。日本のような「自由の伝統」を持たない国において自由の問題を考えるとき、このような行き方が決して誤りでも無益でもないと思っております。

この国際シンポジウムは、時あたかも〈戦後五十年〉という反省の年にあたり、それに大学としてふさわしい内実をもった取り組みでありたいと願いをもって準備されたこと、また聖学院大学総合研究所に設置された〈日本・アングロアメリカ研究センター〉の設置と一九九六年四月の聖学院大学〈大学院政治政策学研究科〉の開設を記念して企てられたものであったことも、本研究所の歴史のひとこまとして記憶されるようここに記させて頂きます。

一九九六年三月

聖学院大学総合研究所　所長　大木英夫